

伝承される「経験知」への着眼： Informalな学びの在り方を巡って

枝元 益祐

学習者の主体性とその学習支援を前提として、図書館サービスの諸側面についての近接領域を毎回紹介しています。前回は、ドロシー・レナード (Dorothy A. Leonard) が提唱した「ディープスマート (Deep Smarts)」という概念に即しながら「経験知」の質的な伝承に着眼しました。その際、「人間は経験から学ぶ (= 知識を創造・再創造する) という認識に立脚して、実践活動の一環としてのシミュレーションの有効性に言及しました。そこでは、例えば、読書活動を通じた経験もシミュレーションの1つであり、学びの機会であるという前提で、その学びの実践活動や直接的な経験の場が図書館にはあることを強調しました。更には、これら結び付けるための活動も図書館のサービスの中にあるという結論を導きました。

このような認識を深化させるために今回も引き続き「経験知」が伝承される側面から言及していきます。その際に下敷きとなる文献は前回同様に、池村千秋による Dorothy A. Leonard の邦訳『「経験知」を伝える技術：ディープスマートの本質』(Harvard business school press)、ランダムハウス講談社、2005年を基にして解説を進めていきます。

ディープスマートは、「その人の直接の経験に立脚し、暗黙の知識に基づく洞察を生み出し、その人の信念と社会的影響により形づくられる強力な専門知識だ」(p.16)としています。このことは、我々が日常生活の中で形成する知恵や知識などの集積体としての経験知の中でも、人間の内面の最も深い部分に根差しているということが出来ます。このようなディープスマートは、社会的文脈や社会文化的な状況の「複雑な相関関係を把握してシステム全体の把握に基づく専門的な判断を迅速に下し、必要に応じてシステムの細部にも踏み込んで把握できる能力」(p.16)であるともされており、「その能力は正式の教育だけでは身につかないが、計画的に育むことはできるし、献身的に努力すれば、他人に移転することも再創造を促すこともできる」(p.16)とされています。

つまり、ここでいう「正式の教育」とは

Formal Education のことで、意図と目的とを伴って計画化・プログラム化された教育的作用のことをいいますが、このような意図性や計画性といった Formal な側面だけではなく、日常生活や経験からの学びといった Informal な側面への着眼も必要であることを意味しています。

また、「ディープスマートは、組織を動かすエンジンだ」という前提で、「ディープスマートの本質とその育成・移転方法を理解できれば効果的なマネジメントができる。組織の中には、頭や手に直感や判断力や知識(目に見えるものもあれば、目に見えないものもある)を蓄えている人たちがいる。このようなエキスパートと呼ぶべき人たちのもっている知識こそが、ディープスマートだ」(p.15)と位置付けています。

その際、コーチングを例に挙げながら、「優秀なコーチは初心者に「やり方」を教えるだけではない」という前提で、「エキスパートは自分の知っていることを移転するだけでなく、教え子が同様の知識を自分で育むよう指導する。実のところ、知恵を直接伝えることなど不可能だ」(p.11)としています。

ここでは、「知恵を直接伝える」という知識伝達型の教育の在り方、言い換えると、教育者と被教育者との関係性に基づいた、それ故に、教育者サイドの意図や目的を伴った Formal な作用の限界性を指摘し、「教え子が同様の知識を自分で育むよう」な追経験型のコーチングによるエキスパートへの道が強調されています。このことは、実践活動や経験などを通じた Informal な学びの在り方への着眼であるということが出来ます。

ここ数回に渡り継続して、特に、図書館での学習活動やレファレンスサービスなどでの経験を通じた学びの在り方、或いは、学習者及びその学習支援者としての専門性形成などに関して言及してきましたが、これらも視点を変えれば、ディープスマートやこれを取り巻く Informal 性を念頭に置いた学びの在り方への着眼であるということが出来ます。

えだもと ますひろ (准教授・図書館学・教育学)